

評価実施年度	令和 5 年度	学校名	大分県立 情報科学 高等学校	
学校教育目標	生徒一人ひとりが多様な選択肢から将来のキャリアを見据え、責任感を持ち自己決定力を備え、高度情報化社会を担っていく基本的な能力や資質を身につけさせるとともに、豊かな感性とたくましく生き抜く力を兼ね備えた人材(材)を育成する。			
重点事項	評価項目	評価の観点	評価	今後の改善方法(学校作成)
カリキュラム・マネジメントの確立	学校教育目標	〇的確な学校経営ビジョンが策定されていて、学校教育目標の達成に資するために重点目標の焦点化が図られ、校長のリーダーシップの下、全教職員による教育活動が展開されているか。	<ul style="list-style-type: none"> 極めて良い。 社会的状況や本県の産業界を支える人材のニーズをとらえて学科の定員増加を確保した判断は素晴らしい。 校訓(勇氣、愛、創造)を踏まえた学校教育目標の達成に向け、中期目標と重点目標が明確に策定されている。 学校教育目標の達成に教職員一丸となり取り組んでおり、文部科学大臣優秀教職員表彰受賞からも良く伺える。 	<ul style="list-style-type: none"> 重点目標「学科・教科を横断した広い視野での情報教育の実践」の達成に向け、「生成AIや授業クラウドを活用した学び」「主体的・対話的な学び」を体現できるような学びの実践・研究を推進する。 新分掌「未来教育研究部」を中心に、「Jyoka Style(本校の学びの形)」の確立を進める。
	PDCAサイクル	<ul style="list-style-type: none"> 〇重点目標を達成するための焦点化された取組指標や達成指標等が適切に設定され、機能しているか。 〇取組指標や達成指標等の評価・検証を計画的に行い、以後の実践に直ちに反映させるなどPDCAサイクルが確立しているか。 〇予期しない課題が判明した時点で、その解決に向けて校内分掌が速やかに機能するように、組織的な責任・運営体制は整備されているか。 	<ul style="list-style-type: none"> 良い。 PDCAを短期で回して達成指標の評価・検証を行い、新しい実践に反映させる着実な努力が重ねられている。 教育活動全般にわたりPDCAによる評価・検証を行い、課題を見出し次の目標の設定に繋げることが肝要である。 多くの企業の賛同を受けながら、教育環境や学校運営を見直し、目標達成に向けて学校運営が推進されている。 生徒の授業態度等からも、学びにはしっかりと取り組んでいる様子を確認できた。 	<ul style="list-style-type: none"> 各種行事や教育活動において短期でPDCAによる評価・検証を行うため、月に1回程度、関係職員による連絡会を実施する。その際、課題改善の見通しの確認・共有と改善に係る期間を再設定する。
	社会との連携・接続	<ul style="list-style-type: none"> 〇「開かれた教育課程」の理念に基づき、育成したい生徒像が家庭及び地域と共有されているか。 <ul style="list-style-type: none"> 情報の伝達・公開を適切に行っているか。(ホームページ・SNSの活用、学校便りの発行等) 生徒・保護者の学校への満足度や要望を把握する取組を行っているか。 地域内外の関係機関との連携や人材を活用しているか。 	<ul style="list-style-type: none"> 極めて良い。 学校HP、Facebook、学校広報誌や学科新聞等を活用して、学校生活の様子を情報発信している。 地域との情報共有に努めたり、中学校での学校説明会の開催等、入学生を確保する動きも盛んに行われている。 生徒、保護者にアンケートを実施して満足度や要望の把握に努めており、結果は良好である。 学外の人材を活用しつつ県下の課題理解に努め、地域課題の解決に取り組む学習態度を育む工夫がされている。 	<ul style="list-style-type: none"> 学校の情報発信の充実に向け、Facebookやホームページ等を月に10回以上更新及び学校広報誌等を学期に2回程度発行する。 地方自治体や外部企業による特別講座および地域イベント参加を学期に2回以上実施する。
主体的・対話的で深い学びの実現	授業の活性化	<ul style="list-style-type: none"> 〇授業の活性化が図られているか。 <ul style="list-style-type: none"> 学ぶことに興味や関心を持ち、見通しを持って取り組み、自己の学習活動を振り返って次につなげる「主体的な学び」が実現できているか。 授業のねらいに応じて、言語活動の充実を図ることで、「対話的な学び」が実現できているか。 授業の中で、知識を相互に関連付けて深く理解したり、情報を精査して自己の考えを形成したりする「深い学び」が実現できているか。 ICTを活用して、授業の効率化や授業の振り返りにつながっているか。 〇総合的な探究の時間や課題研究の学びとその他の教科・科目の学びが有機的に結びついているか。 〇生徒の学習習慣が定着し、学力及び学習意欲の高まりがみられるか。 	<ul style="list-style-type: none"> 良い。 教師は何を伝えるべきかを自覚して生徒と向き合い、生徒は学習内容に主体的に授業に取り組んでいる。 教室は整理整頓され、授業規律もできている。 本時の目標と学習内容が黒板に明示され、授業の流れがつかめる工夫がある。 生徒の様子に対応してタブレットでの検索活動にも取り組ませ、新たな知識を教授して学びを深める授業もあった。 主体的な授業の展開には、授業ごとにバラつきがみられた。 ICTで黒板に掲示された情報は手元(タブレット上)にあり、課題を真剣に考えているか危惧する状況も散見された。 展開、発問、振り返りが重要との認識の下で授業改善に取り組んでいることは評価できる。 本校の独自の授業では、挑戦的な活動の場面で設定される必要がある。 発問が事前に準備され、生徒の状況に応じて切り替えていくという柔軟な展開が求められる。 ヒントの準備も重要で、解を自ら見出せる展開を構想し、結果をほめて達成感を持たせることが肝要である。 教師の授業アンケートの項目において、授業実践での実態を把握できるようにすることが必要である。 	<ul style="list-style-type: none"> 学期に2回実施する互見授業では、「タブレット端末を用いて教材を提示することは効果的か?」「グループ協議の時間や人数は効果的であるか?」を検証する。 教員対象・生徒対象授業アンケート、具体的な実践例アンケートを2回(1学期末と2学期末)実施し、授業改善に生かす。 ICT(生成AI等)の活用実践紹介を含めた提案授業または職員研修を学期に1回以上実施する。
安全・安心な教育環境	いじめ・不登校等の対策	<ul style="list-style-type: none"> 〇計画的な面談・相談を通して、個々の生徒の状況を理解した上で、生徒指導が学校の組織を挙げて行われているか。 〇いじめ・不登校防止対策に取り組む体制が整備され、いじめ・不登校問題に対して適切な対応がなされているか。 	<ul style="list-style-type: none"> 極めて良い。 生徒の声から、計画的な面接や進路相談を通して生徒理解に努め、適切な対応が組織的に行われている。 スクールカウンセラーによる生徒面談数は10件程度と落ち着いている。 椅子にテニスボールを取り付けた異音対策により、雑音による精神的な苦痛を訴える生徒への配慮がある。 教職員研修を行い、生徒集団の安定、不適応の防止促進に取り組んでいる。 生徒指導に割く時間が少なく済み、学校運営や教育活動に集中できて、安定した学校運営に繋がっている。 	<ul style="list-style-type: none"> 各学期始めに生徒理解を目的とした担任・副担任等による面談期間を設定する。 いじめ等に関するアンケートを1、2学期末に実施するだけでなく、毎週の学年会議で生徒の状況を共有する。 外部専門家(SC、SL等)を活用した職員研修を実施する。
	安全管理	<ul style="list-style-type: none"> 〇学校施設等の安全点検や通学の安全指導及び教職員・生徒の安全対応能力の向上を図るための取組が定期的に行われているか。 〇学校事故や非常災害など、緊急事態発生時に適切に対応できるよう、危機管理体制が機能しているか。また、生徒の安全を確保するための具体的取組が行われているか。 	<ul style="list-style-type: none"> 極めて良い。 自転車事故はマナーの指導によって夏休み以降は少ない状況にある。 生徒昇降口に自転車危険箇所マップが設置され、注意を喚起している。 自転車危険箇所マップに、具体的な危険、生じた事象の内容を表示するとなおよい。 QRコードで具体的な危険や事象を読み出せるようにする等、本校ならではの工夫が望まれる。 危機管理マニュアルは整備され、組織的な機能が発揮できるようになっている。 AEDも設置されていて、校内における生徒の安全性を確保できている。 	<ul style="list-style-type: none"> 生徒の交通意識向上に向け、生徒会と連携した駐輪指導(鍵かけ等)を学期に1回程度実施する。 自転車事故発生時には、SHRや全校集会等で注意喚起を行う。また、危険箇所ハザードマップの作成を継続し、事故概要等が分かる工夫を研究する。
信頼される学校づくり	働き方改革	<ul style="list-style-type: none"> 〇生徒と向き合う時間を確保し、生徒に対して効果的な教育活動を行うことができるよう、働き方改革が推進されているか。 <ul style="list-style-type: none"> 会議・分掌業務、学校行事の精選、見直しを図られているか。 組織的な指導・運営体制の構築と学校の活動方針の徹底等による部活動改革に取り組んでいるか。 情報共有の効率化や校務情報化の推進など、ICTの効果的な活用によって業務改善が図られているか。 	<ul style="list-style-type: none"> アンケートより、「仕事にやりがいを感じる」、「管理職に対する信頼度」の割合が高く職場の雰囲気は良好である。 アンケートより、「仕事がちょうどよい」の割合が約6割と低く、仕事の分担に偏りあるように伺える。 生徒指導に割く時間が少なくなっているとの事で、業務分担に改善の余地があると言える。 学校行事の見直しを求める声もあり、分掌や組織編成のあり方を検討することが望まれる。 超勤時間にはさほどの改善が見られないが、休暇等の取得状況は改善しているように伺える。 管理職には慢心せずしっかりと先生方と向き合っていただくようお願いする。 	<ul style="list-style-type: none"> 外部講師を招く学科や学年の行事について、全体を調整する分掌「未来教育研究部」を新設する。 分掌内の業務等を重要度別に仕分けし、副主任が担当する役割や業務割合を調整することで業務の偏り改善を図る。
	学校課題の解決に向けた取組等	<ul style="list-style-type: none"> 〇外部への情報発信及び進路指導体制について 	<ul style="list-style-type: none"> 非体育系の部活生も全国的なコンテスト等に挑戦し、その成果をアピールして、新たな生徒獲得に繋げて欲しい。 最終学年における小論文指導等による入試対応だけでなく、進学に関わる授業の充実を図ることが望まれる。 就職とともに適切な進路指導体制をしっかりと構築することが望まれる。 生徒の獲得のため、中学校等への訪問の機会を減らすことなく、進めていって欲しい。 	<ul style="list-style-type: none"> 各種コンテスト・競技会等への参加を文化部の生徒だけでなく、課題研究(2、3年生)の授業を通して広く呼び掛ける。 新「進学指導体制」の確立を目指し、学年・学科と連携した進路情報交換会を月に1回程度実施する。 本校の特徴を知ってもらうために、中学校訪問の際は出身中学校の卒業生による進路説明(動画等を含む)を計画する。

総合評価

・地域の未来を創造する人材を育成するという使命を中核に据えた学校経営ビジョンは地域や生徒の実情に応じたもので、管理職の強力なリーダーシップの下、学校運営が適切に行われている。県ともコミュニケーションをとり、魅力ある学校づくりに常に新たな挑戦をして取り組んでいることは高く評価できる。

・授業は教育活動の中核である。学校教育目標を達成するために、学習環境を整備し、生徒の夢の実現に向けて最優先で授業の改善を推進しなければならない。

・探究力の育成に力点を置く本校の授業では、何よりも生徒が問いを引き受け、協働的に作業に取り組んで独自の解を導き、自信を獲得することことが肝要である。そして、授業研究を通して問いの重要性を認識し、教材研究に努めて多様な問いを開発することが肝要である。着実な授業改善の推進が急務である。

・就職先や進学先の情報もiPadで見る事ができ、情報量も拡充してほしいとの要望があった。生徒自らが望むアプリの開発に取り組ませると自信を獲得する機会になり、情報科学高校ならではの学習指導の一環にもつながると考えられる。

・就職先と同様に進学先の情報もiPadで見る事ができるように、情報量の拡充と共に改善して欲しいとの要望があった。生徒自らが望むアプリの開発に取り組ませると自信を獲得する機会になり、情報科学高校ならではの学習指導の一環にもつながると考えられる。

・iPadを用いた授業や課題提出に関して、情報を適切に配信してほしいとの連絡方法の改善を求める声もあった。これらの改善策を生徒と共に考える事で、教師の新たな気づきにつながり、ひいては学校改善にもつながると考える。

・体育系が11部、文化系は8部あり、全体として部活は熱心である。フェンシングでは団体が県大会の上位を占め、個人男女が優勝して全国大会に出場している。女子バスケットボールが県大会でベスト8の活躍。また、コンピュータ部は情報処理競技会で団体1位、未来創造部が日経SDGsコンテストで決勝大会にまで進出していることは評価に値する。

校長コメント(次年度の改善策)

・ご指摘いただいた点は、十分関係分掌主任と相談し改善していきたいと考えている。また、お褒めいただいた点も甘んじることなく、より一層良いものになるように取り組んでいきたい。次年度は校長のリーダーシップがなくても、各々の教員が「Jyoka Pride」を持ち情報科学高校の発展に寄与できる体制の構築と、職員の意識改革を行いたいと考える。特に「未来教育研究部」という分掌を立ち上げ、情報科学の学びのスタイル「Jyoka Style」を確立させたい。また、生成AIを活用して観点別評価のルーブリックを作成し、全県下のモデル案を作り上げたいと考えている。